
short-lived love

あかい 郁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

short-lived love

【Nコード】

N1409E

【作者名】

あかい 郁

【あらすじ】

なんとなく、生きていた仕事も、恋愛も無難に…夢に現れた懐かしい彼女・突然の死の連絡・死んだ彼女を見てしまうそこから徐々に沸き上がる微妙な違和感…彼女は現実なのか夢なのか、彼女は何を伝えようとしているのか…彼の時間は動き出した

はじまりは目覚め

目が覚めた。頭が重い。身体が思うように動かないので、首だけを動かしてみる。辺りは真っ暗で良く見えない。開かない目を擦って時計を探す。が、見当たらない。仕方なく身体を起こしてみる。やっと暗闇に目が慣れてきたところで、時計が見当たらないどころの騒ぎではなかった。

「どこだここ？」

次の瞬間、自分の寝ぼけ具合にがっかりする。そうだ、今日引越してきたんだ。頭をかき、軽いため息をついてから、水を飲もうとキッチンへ向かった。キッチンの電気を付けようと、手探りでスイッチを探す。右手にそれらしき感触が上下に2つあるのを確認した。そのうちの上側を押す。ブーンツと換気扇が作動した。2分の1の確立で外してしまう。またため息をつき、換気扇を消す。今度は下のスイッチを押してみる。すると蛍光灯が2回程点滅してついた。リビングがうつすらと照らされ、まだ段ボールだらけの部屋が見える。さっきより深いため息が出た。そこでようやく置き時計の蛍光緑に光ってる数字が見えた。午前2時過ぎ。身体が重いのは徹夜の仕事と、引越しを強行突破でこなしたせいだ。タバコを一本吸い終わると、また睡魔が襲ってきた。そのままベッドに戻り、布団に残った自分の温度を確かめながら眠りについた。

妙な感覚だった。見覚えがあるような無いような場所。真っ白で何も無い空間。春と言うより初夏のような暖かさだ。

「なにしてんの？」

一歩踏み出そうとした瞬間、後ろから声がした。振り向くと懐かしい顔が居た。

「こんなところだなにしてるの？」

その顔は眉間に皺を寄せ、僕を真直ぐ見つめていた。

「何って別に…そっちこそ何？」

「どうして…」

寄っていた皺が離れ、急に悲しい顔になる。

「何？また泣くの？」

「あたしはもう泣かない」

「じゃあ何？」

「泣いてるのはそっちでしょ？」

「えっ…」

何かに引つ張られるかのように目が覚めた。さっき目が覚めたときよりも少しすっきりした気分だ。まだカーテンの無い窓から日が指している。時計は午前10時50分を指している。

「夢か…」

とても懐かしい…いや、そんなに懐かしくも無いが…そんな奴が夢に出てきた。もう随分連絡を取って無い。それにしても…泣いてるのはこっちだって？夢でも偉そうな奴だな――。

バタートーストにコーヒ―、昼食に近い朝食をとっていると、携帯が鳴った。この音は律子だ。

「もしもし」

俺はやる気のない声で出た。

「おはよう、片付け終わった？今日どうするの？」

「ああ…」

頭の中ががばーっとする。律子の声は入ってこない。

「また寝起き？もしかして終わってないの？」

律子の声を聞き流すように夢のことを考え続けていた。夢ってやつは真相心理、結局自分が気にしていることが出てくるものだと思っっている。ってことは…気にしてるのか？アイツを？

「ちよつと！聞いているのっ？」

律子がヒステリックに叫んだ。耳がキーンとし、電話越しでも殴ら

れたような気分だ。

「あ、ごめん」

「もう！とりあえず今からそっち行くから！」

律子がそう言い捨てると電話から空しい音が響いた。

律子は半年前に友だちの友だちという形で出会った。在り来たりな出会いだ。好きとかなんだとか、面倒な段階を越えてほぼ付き合っていることになっている。僕にとっては必要だったし、とても楽な相手だった。

携帯をテーブルに置こうとしたそのとき、また電話がかかってきた。携帯を開くと知らない番号からで、少し警戒し、出るかどうか悩んだ。だいたい少なくともはなったが、変な勧誘の電話だと面倒だと思った。それにしても随分長く、しつこく鳴らしている。仕方ない、出るか。と通話ボタンを押した。

「もしもし？」

つい、疑問系のイントネーションになってしまった。

「あ、あの小山さんですか？」

セールのような営業用の女の声がすると思ったが、聞こえてきたのは若い、少なくとも僕よりは若い女の子の声だった。僕の番号を知っていて、名指しでかけてきた女の子に拍子抜けし「はあ…そうですが」と間抜けな声を出してしまった。

「通じた！」

何やら周りに報告している声がした。マイク部分を手で押さえているのか、くぐもってはいるが「よかった」だの「早く伝えて」だの聞こえる。ますます疑問の念が湧いてきた。その場で切ってしまうかと思ったが、相手の出方を待つことにした。

「あの、覚えてますか？ミサワです」

「ミサワ？」

ミサワと言う名前は知っているが、僕が知っているのは50代のオッサンだ。この声の主ではないことは考えなくてもわかる。しかし、覚えていますか？と聞いてきているのだから、僕が知っている人間

であることには違いなさそうだ。

「あの、東高校の…」

その高校の名前を聞いた瞬間鳥肌が立った。頭の中の疑いの念や、もやもやが一気に晴れ渡る。

「あつ、ミサワセイコ？」

「そう！セイコ！」

「どうしたの！元気？」

急にとても懐かしい気分に包まれた。三沢聖子。高校で講師をしていたときの生徒だった。どうりで声が若い。10歳以上も年下からのあまりにも突然な電話だった。緊張が一瞬にして解かれたせいか、手のひらに変な汗をかいてることに気付く。立ちっぱなしだったのにも気付いて、ソファアに腰を降ろし、背もたれに全体重を預けた。「ホント久しぶりじゃん。どうしたの？今何してるの？」

ソファアに座った瞬間から、数少ない仲の良かった生徒からの電話に興奮し、ベラベラと勝手に言葉が出てきてしまった。

「あのね…」

聖子の声がワントーン落ち気味になった。よく、疎遠になった知人から連絡がくるのは良く無い知らせのことが多い。聖子の声はそんな予感を過らせるには充分だった。これからきつとよくない知らせが来る。そして、何となく誰の話かも予測がついた。自然とソファアから身体を起こす。自分も、もう良い歳、それなりのことに対する覚悟の仕方くらい備えていた。少し、緊張しながら促してみる。

「うん、何かあったの？」

「…あのね」

セイコは一呼吸置いて、言葉を詰まらせ、そして多分、感極まるのを押し殺し、息を大きく吸ってから一言つぶやいた。

「ウイカがね」

やっぱり、と思う。懐かしい名前。いや、そんなに懐かしくも無いか。…さっきも、同じ事を考えていた。でも、さっきと大きく違うのは、気持ちがざわついてのことだった。嫌な事は先送りにしな

い。それが僕の決まりごとだった。どんなに嫌なことでもそこで放置する方がよっぽど辛いと知っている。口の中がからからに乾いて、喋るのがもつれた。

「ウイカって、カヤマウイカだよね？」

何の確認だよ。と頭の中でツツコミを入れる。自分の中の余裕や覚悟を少しでも持続させたい一心なのだろう。でも、その抵抗は空しく、心臓がドクンと妙な動きをした。僕の確認は聖子にも効果があったようだった。張り詰めていた線を切られたかのように泣きながら言う。

「そう、ウイカが死んだの」

「あ……」

次の言葉が出て来なかった。

「もしもし？小山！大丈夫？」

聖子の声に戻される。自分が積んで来た覚悟なんか一気に崩れ去るくらいの衝撃だった。その時、はたと思う。もしかしてイタズラなんじゃないか？アイツが死ぬワケない。根拠のない自信があった。

「…うん、あのさ、イタ…」

「それでね、明日、お通夜なんだけど…」

聖子の声は歪んでいて聞き取りずらくなっていた。紛れも無い事実なのだと、聖子の声は語っていた。

「わかった、わかった、行くよ」

反省した、そして少し自分に悲しくなった。僕の返事を聞いて、聖子は早口で喋り始めた。でも、その言葉は引きつつていてよく聞き取れない。

「どうしても、小山には知らせたく…ってゆーか知らせなくちゃダメで、ウイカの携帯…電話番号調べて…」

頭の中がゆっくりと真っ白に、真っ黒になる感覚が襲った。悲しいなんて感情すら込み上げてこない。頭の混乱が自分の意志とは別のところで働いているのを感じた――

一。

放課後、西日がよく当たる美術室で、絵の具の付いたパレットを教室にある水道で洗っていた。生徒が洗が残したものは30枚以上あって、これだけでも重労働だった。僕は美術の臨時講師で、この高校に来てから来年の春で3年になる。毎日パレットを洗うのが日課になっていた。半分洗ったところで手を止める。水を出しっ放しにしながら、何となく山へ沈んで行く夕日を眺めていた。教室には生徒は一人も居ない。聞こえて来るのは吹奏楽の様々な楽器の音と、野球部が大声で叫んでいる声。僕の日常が詰まってるそんな穏やかな気分だった。

「こんにちは」

扉の開く音と同時に彼女の声がした。僕はわざと「はいはい」と素っ気無い返事をする。

「何その言い方、そっちが呼んだくせに……」

彼女はそう言うのと回れ右をして扉の方へ戻ろうとした。

「ああゝ待って待って」

僕はパンツのポケットにしまっておいたオレンジ色の袋をだした。

赤いリボンが可愛く結んである。それを彼女の方に差し出した。彼女は振り返り、西日に照らされた目がキラリと光る。そして実に冷静な声でこう言った。

「あのさ、せめて何か一言ないの？」

「……お誕生日おめでとう」

やっぱりクソガキだ。

「ねえ！ちょっと！どうしたの！」

目の前に律子がいる。いつ来たんだらう？

「あたしが泥棒だったらどーすんの？」

「あ、いや……死んでたかも」

律子の指摘に一生懸命答えたつもりが、その言葉に追い討ちをかけられる。自爆だ。急に悲しくなった。泣きそうになるのを堪える為

に顔を床に降ろす。

「なによ、抜け殻みたいになっちゃって」

「…だめだ、眠い」

全てがめんどくさくなった。脱力と言うか、なんとも言えない気分になった。もうなにもしたくない。

「…ふーん…」

「ごめん、今日は帰って」

「久しぶりに会えたってのに…」

「だからごめんって言ってるじゃん」

「何かあったんでしょ？どうしてなにも言ってくれないの？」

彼女という存在ならば当たり前前の発言だったのだろう。でも、律子の言葉は今の僕には逆効果だ。

「帰らないなら、俺が出てく」

感じが悪いことこの上ない発言だ。八つ当たりでしかない。

「…わかったよ、帰る」

律子は納得いかないという空気を出しながらも、玄関へ向かう。

「落ち着いたら連絡ちょうだい」と言う言葉を残してドアを閉めた。顔を上げると段ボールが冷たく僕を見つめている。それを無視してベッドに入り込んだ。

夕方、雨が降っていた。日曜日だというのに街はしつとりと静寂を纏い、生温い空気が充満していた。そう言えば、あいつは雨女だったな。ドライブのときも、キャンプのときも、いつもいつも雨だった。

車に乗って、式場に向かう。久しぶりに出した喪服は少しよれていた。引越してから一番最初に着るスーツが喪服だなんて誰が予想できたろうか。昨日の夜、聖子から電話があつた。通夜の時間と場所を覚えてくれた。

「みんな来るから、ちよつとした同窓会みたいだね」
聖子は精一杯明るい声でそう言つた。

車に乗って、式場へ向かう。雨はさつきより強まって、初夏の空気を一層蒼く深くさせた。まだ、実感が湧かない。

少し、寄り道をしてみることにした。真直ぐ行くはずの交差点でウインカーを付け、右に曲がると公園通りの100m以上続く桜並木へ入る。全国でもちよつとした観光スポットで、桜の季節には観光客が桜の花びらより多く来る。もう季節は終わり、青々とした葉が、天から降る恵みに静かに浸っているように見えた。そうだった、ここ、一緒に歩いたんだ。

「誰のせいだよ、この雨！」
僕はわざと怒鳴つた。

「やっぱアタシのせいかなあ？」
彼女は僕がどれだけ喚いても動じない。わざとだと分かっていたし、何より慣れていた。花見をしようと言う急な誘いに嫌々ながら来てしまったが、やっぱり雨だった。そして寒い。5月だと言うのに春らしさの欠片も感じない日だった。北国の春と言えばそうだが、それだけでイライラする充分な要素だった。いつもの場所で待ち合わ

せをし、落ち合ったのは良いものの、彼女は傘を持っていなかった。
「傘持ってきてないの？1本しかないよ」
「やった、じゃあ、アイアイ傘ね！」

「何が「やった」だよ、計画的犯行じゃないか」
あのと時の言葉をそのまま言いながら、桜並木を過ぎる。

彼女はいつも僕の近くに居た。放課後必ず美術室に遊びに来た。毎日メールや電話をしていた時期もある。空が明るくなるまで大笑いしたり、悩みを聞いたり、ケンカしたり、いろんな話を話した。学校でもたくさん話していたのに、それでも彼女との会話はずっと尽きなかった。仲は良かった。きつと生徒の中では一番だっただろう。

僕は彼女の気持ちに気付いていた。でも、僕はずっとその気持ちに答えなかった。ちゃんとした告白をされたのはまだ彼女が1年生のとき、現代の高校生らしくメールでの告白だった。ただ、ちよつと不思議な内容の告白だったのを覚えている。

『好きでい続けても良いですか？』

僕にはこの言葉がよく分からなかった。と言うか、返答に困った。好きと言ってもらえるのは嬉しい。でも、こんな言われ方をするとあからさまには振ることすらできない。だからこう返した。

『良いけど、ダメって言われたらどうするの？』と。

彼女はその質問に答えなかった。少し、高校生には意地悪過ぎたかもしれない。告白はその一度きりだった。彼女は僕と正反対の人間で、幸せな家庭で育ち、友達もたくさん居て、誰からも愛されていた。僕にとっては羨ましい存在の一つでしかなかった。普通なら最初に告白された時点で彼女を突き放せば良かったのに、僕はそれをしなかった……いや、きつと出来なかったのかもしれない。

「あれ……どうして連絡取らなくなっただけ？」

思わず声に出た。どうしてだっただろう、何かあったんだっけ、そ

れとも何となくだっただろうか。あんなに仲が良かったのに。

ボーっとしていたのだろう。道を間違えた。と、言うより間違っ
て来てしまった。普段ならあり得ない間違えだ。久しぶりに来た。
彼女と待ち合わせをした場所。いつもの場所。地下鉄の出入り口。
4番出口。いつも彼女は僕より先に居て、出入り口の横にあるベン
チに座って待っていた。その姿は主人を待つ忠犬のようで、少し切な
くなる。きっと彼女は何時間でも待ち続けるんだろう。何を考えて
いたのか。何を思っていたのか。どうして人間はいつも気にしない
ようなことを、無くなってから気にしたりするのだろう。急に更地
になった土地に前は何が建っていたとか、芸能人が死んだりすると
惜しい人を無くした。などと言ったりする。今、彼女はそこにいな
い。

何となく腕時計を見る。別に、誰かを待つてゐる訳でも無い。でも、
ちよつとだけ「待つてみる」ことにした。出入り口から10m程の
距離にある歩道に車を止め、ハザードを付けた。僕の定位置だ。不
思議なくらい人が居なかった。雨の音と、ワイパーの音。他には何
も無い。窓を開け、タバコに火をつける。その手を外に出してみた。
生温い空気に手が触れる。少し強まった雨がそれを流すように当た
った。タバコの煙りが揺れる。その光景を見ていると急に眠気が襲
つて来た。瞼が重い。世界が歪むほどの睡魔だ。このまま寝てしま
おうか……。何となく、また彼女が夢に出てくる気がした。今の僕に
は通夜に行くよりその方が良い気がした。ジュツとタバコに雨が当
たる。その音が頭のなかでリピートされるのを感じながらゆっくり
と目を閉じた。

その途端、携帯が鳴った。心臓が飛び出すかと思うくらい驚く。律
子からだった。そうだ、昨日結局連絡するのを忘れていた。

「もしもし」

「連絡してって言ったのに！今どこ？」

かなり怒っている、いや、心配させたのだろう。

「ごめん…実はいろいろあって」

律子のおかげで一氣に眠気が覚めた。背伸びをし、欠伸をし、何となく出入り口の方へ視線を向ける。いつの間にかベンチに誰かが座っていた。目を疑う。それは白いコートを着た見覚えのある女だった。雨にも関わらず傘もささずに空を見ている。僕は息を飲んだ。いきなりファンツと大きな音がした。「ウワツ」情けない声を出してしまった。身体が前のめりになり、クラクションを鳴らしてしまったのだ。

「何っ？今車なの？」

律子も驚いた声を出した。目を離れたのは一瞬だった、彼女が消えている。

「ごめん、またかけ直す」

携帯を切り、車から飛び出して全速力で走り出す。雨は強さを増して降り注いでいるのに、風が無いせいか優しく感じた。空は分厚い雲のお陰で夕方なのに暗く感じる。心臓が高鳴った。見間違いや幻覚かもしれない。それでも彼女の後を追う。角を曲がり大きな道へ出る。辺りを見渡したが誰も居ない。どちらに行くか悩んだが、立ち止まり顔を空へ向けた。どこからこんなに水が落ちて来るのだろう。どんどん僕に染み込んで行く気がした。雨が彼女の居場所を教えてくれないだろうか。そんな馬鹿げた事を考える。何やってんだ、車に戻る。そう思い、顔を下げたとき、大きな歩道橋が視界に入る。まん中に人陰が見える。自然と身体の奥深くから声が出た。

「栢山さんっ！」

こんな大声が出せたことに驚く。が、彼女は気付かない。

「やっぱりイタズラじゃないかっ」

自然とイライラしてくる。聖子の電話が何だったのか、僕の落胆は何だったのか。込み上げて来るイライラを打ちまけてやろうと歩道橋へ走る。もう、水溜まりに足を突っ込んでみても気にしなかった。豪雨のせいで道全体が水溜まりのようにバシャバシャ鳴る。歩道橋の

元まで来て上を見上げる。階段は螺旋状になっていて、少しの高さが永遠に続くような気がした。それを一気に駆け上がる。毎回、この女には振り回されてる。久しぶりに思い出したら死んだだって？そこに居るじゃないか、嘘をつくなよ。僕は何をしてるんだろう。僕は…僕はどうして彼女を捜しているんだろう。

「かしわ、かしわやまん？」

4月に栄高校に来て始めての授業は入学したばかりの、着慣れていない制服が妙に微笑ましい1年生が相手だった。このとき僕は多少緊張していた。はじめての学校はいくら緊張する。出席簿を見ながら、生徒と名前を確認する。

「先生、カヤマって読むんです」

につこりと笑う彼女の笑顔は、裏がありそうな、高校生の純粹さなんか微塵も感じない笑顔だった。10歳以上離れた小娘になめられまいと、余裕を持ってご挨拶をする。

「ああ、よろしくね、カヤマさん」

「はい、こちらこそ、先生」

「クソガキ」これが第一印象だった。

上まで着いたとき、彼女はまだ歩道橋のまん中に居た。内心また居ないのじゃないかと焦っていた。10m程の距離に彼女は居る。道路の方を向きながら遠くを見つめている。雨はまだ強いのに、やっぱり傘をさしていない。僕も彼女もずぶ濡れで、相合い傘でも良いから傘を持って来るべきだと思った。僕は呼吸を整え、その場で大きく息を吸ってもう一度叫んだ。

「初夏っ」

わざと聞こえないフリをしているのか？それとも雨の音で聞こえないのか、もしくは本当に幻でも見ているのか。彼女は微動だにしない。一歩づつ近付いてみる。走って行って、消えてしまっても嫌だと思った。未だにそこに居る彼女が現実なのか幻なのか分からない。少しづつ彼女の、初夏の横顔が見えてくる。懐かしかった。少し、痩せたかもしれない。少し、綺麗になったかもしれない。何だよ、やっぱり生きてるじゃないか。本当にイライラさせるのが上手い女だ。どう言ってもりなんだよ。怒ってやろうか、グーで殴ってやろうか。様々な感情のまま初夏の元に着く。少し間を置いて名前を呼んだ。

「初夏」

彼女の頭が少し揺れた。僕は初夏の右肩に手をかけ、こちらを向かせるように引つ張った。思いつき殴ってやろう。

「お前：なにしてたんだよ」

心で思っている事は必ずしもその通りではないらしい。どの感情が僕をその行動に導いたのだろう。雨のせいだろうか、日頃の疲れだろうか。何よりもまっ先に、僕は初夏を抱き締めていた。初夏のコートは雨をたつぷりと吸い込んでいて、酷く感触が悪くひんやりとした。それでも、小さい彼女を僕は包むように、きつく抱き締めた。幻じゃない。やっと、そう確信できた。そこでようやく気付く。僕は彼女に会いたかったのだと。初夏から離れて顔を見る。

「あ……」

例えばうがなかった。初夏の顔は白く、反比例するように黒い瞳が真直ぐ僕を見つめる。そこからは感情が何一つ読み取れなかった。

「何してんの？」

一瞬、後ろから声がしたような気がした。振り向いても誰もいない。もちろんそれは初夏が言った言葉だった。

「こんなところだなにしてるの？」

続けて初夏が言う。僕はまたわざと怒鳴った。

「そっちこそ何やってんの？聖子から電話あったけどあれ何っ？」

「どうして…」

そう呟くと初夏は目を下へ反らし、口をへの字に曲げる。久しぶりに見るその顔を前に僕は急に面白くなって、今にも笑い出しそうになる。

変わってない。1年前と一緒だ。

「何？また泣くの？」

僕はわざと意地悪く言った。

「あたしはもう泣かない」

「じゃあ何？」

「泣いてるのはそっちでしょ？」

その言葉に頭の後ろ当たりが震える。思い出した。これは夢の…

「最悪、酷すぎるよ」

「え…」

気が付くと車の中に居た。驚いて辺りを見渡す。そこは「いつもの場所」だった。雨は上がっていて、西日が眩しく輝いている。素直に混乱した。さっきあったことは現実だったのか、判断出来なかった。コートを触ってみるが、濡れていない。靴も濡れてはいなかった。

「夢？」

あれだけリアルな夢を見たのは始めてだった。雨が当たる感覚も、最後に見た初夏の顔も声も全てがリアルで、抱き締めた余韻が寂しさを誘って途方に暮れそうだった。

「…あはは」

ため息の様な笑いが出た。エンジンをかけ直した時、初夏の言葉を思い出す。

『泣いてるのはそっちでしょ』

その通りだった、僕は今、泣いている。

#2

あれから1週間が経った。その後、結局通夜には行かなかった。

聖子から連絡が来ると思っていたが、それすらもない。結局、初夏が生きているのかどうなのかすらわからないままだ。こっちから聖子に連絡しても良かったのだけど、きつと真実は一つだ。初夏はいない。あの日あったのは、僕が見た夢で心のどこかで僕が望んだことだ。そう解釈することにした。

「あ、そこ左ね」

助手席の律子が言う。久しぶりのデートだった。行き先は律子任せで、どこに行くのか聞いても教えてくれなかった。6月下旬の日ざしと空気は心地良く、あの事さえ無ければ僕の頭は今を思いきり楽しんだはずだ。

「今は忙しくないの？」

何となく出来てしまう間を埋める様に律子が言った。横目にコンビで買ったミネラルウォーターのキャップを捻るのが見える。

「うん…」

「まあ締切りぎりぎりになって、慌てても知らないんだから」

律子の指摘は当たっている。実際、仕事が溜っていて、締切りも近いでも今は自宅にこもってパソコンと睨めっこする気分には到底なれなかった。

今の仕事。僕はフリーでグラフィックデザイナーをしている。美術大学を出た後、プロダクションに就職した。でもいつの間にか1人で仕事するようになっていた。デザイナーなんて自由そうな職業にも、しっかりとした上下間系と鬱陶しい人間関係がついてきた。群れることが苦手な僕はその職場を辞め、フリーで活動するようになった。正直、フリーで仕事をするのにはそれなりの苦労があつて、一番に上がったのは金銭的な苦労。そんなとき、知り合いの知り合いから、高校で美術を教えられる人間を捜してと言う話を貰った。

いつ使うか解らない講師免許があんなにも輝いて見えたことはない。今は講師の仕事を辞め、なんとか軌道に乗れたデザイナー業一本で生活をしている。

にしても、締切りが…ちゃんとやらなきゃな…

「もうっまたそんな顔して」

もう我慢出来ないと言わんばかりに律子が言う。律子には『昔の教え子が死んだ』としか説明していない。全てを、あの出来事を話す気持ちにはなれなかった。

「そんな顔って…してた？」

「してるしてる！とても彼女とデートしてるとは思えない顔」

「ごめん…」

「教え子が亡くなっちゃったのは悲しいけど、特別な子じゃなかったんでしょ？そんなに落ち込まないでよ」

謝りながらも律子の言葉に引っ掛かるものを感じた。

「特別な…」

「あ、見えて来た、今日のデートはここ………なんか言いかけた？」

「いや、なんでもない」

『特別な子』ってなんだろう。僕はそう呟いていた。

『今、なにしてます？』

仕事に暇ができると僕は決まって初夏にメールを送った。用事も無く、意味の無いメールを送るのは日常茶飯事だった。彼女は大体5分もしない内に返事をくれる。僕は携帯を持たない主義で、メールはパソコンからだったけれど、初夏とのメールは何十通と続いた。

『ピロン』パソコンからメールの受信音が鳴る。初夏から返事が届いた。やはり5分も経っていない。マウスを動かし、メールを開く。モニターには短く1行だけ

『今は、家出中』

とだけ書いてある。

「…なに言ってるんだコイツ」

ああ…またくだらないこと言ってるなあこの人、と内心思った。一応『早くお家に帰りましょう。』と先生っぽいことを打ち、送信ボタンをクリックした。

高校を卒業してからの初夏は、悩んでいることが多かった。専門学校へ入学し、友達も羨ましいほど多かった。僕から見れば何一つ悩みなんて無くて良い人間なのに、初夏と連絡を取るといつも何かしら悩んでいる様子だった。相談に乗っていても、肝心なところを避けて話している感じで、いつの間にか話は脱線してしまう。僕は熱心に話を聞く方では無かったし、いつの間にか話してるのは僕の方ばかりになっていたせいで、彼女が何に悩んでいるのかしつかり聞いたことが無かった。

雑用を進めながら、何となく時計を見る。21時ちょっと前だ。

さっきのメールを送ってから1時間が経過している。

「…遅い」

止せば良いのに、僕の中ではちょっとした心配の念が浮上し始める。テレビのスイッチを入れ、冷蔵庫からビールを取り出す。タバコを吸い、気にしない様に自分を促す。テレビ観ながも、耳はどうしてもパソコンの方へ集中してしまう。段々ライラしてきた。もう一度メールが来ていないか確認する。が、来ていない。

「はあ…」

ため息が自然と出る。

「クソ…なんで俺が…」

とぼやきながら、電話の子機を手を取った。初夏に電話を掛過ぎてるせいで、番号を調べなくても頭に浮かぶ。立ち上がったまま、番号を押し、子機を耳にあてた。

『プ…プルルルルル』

コール音が鳴る。

「…はい」

以外とあっさり、初夏が電話に出た。

「あのさ、なにやってんの？」

開口一番に怒鳴る。

「何って、家出だって言っただじゃん」

「だから、早く帰れって」

「イヤだ」

「イヤじゃないから、今すぐ帰りな、大体家出なんかしたって何の意味もないだろおが」

「…あのさ、何の電話？友達の家に居るから大丈夫だよ…ってゆーか今日は絶対家には帰らないから」

初夏の声は冷静で、少し冷ややかだった。でも、彼女の嘘は見抜いていた。微かに聞こえる車の走行音と敢えて作っている冷静さ…なんでコイツはここまで分かりやすいんだろ。僕はもう次の行動を決めていた。

「柏山さん、外に居るでしょ…今どこ？」

「う~~~~ん…」

「今から迎えに行くから、場所教えて」

「…じゃあいつもの場所に、20分後でお願いします」

「はい、じゃあね」

電話を切り、外に出る準備をする。何故ここまで面倒をみなきやならないのか、自分でも全く理解できないでいる。ただ、やっぱり、彼女は放つとけない。ただそれだけだ。

夜の道は車通りが少なく『いつもの場所』に早く着いてしまった。地下鉄の出入口からは会社帰りのサラリーマンがちらほらと出て来る。人の波が途切れると、チューリップハットをかぶった女が階段を登って来るのが見えた。初夏だ。辺りをきよきよ見て、僕を捜している。僕を見つけると耳に入れていたイヤホンを取りながら、こちらに歩いて来る。助手席側の窓をコンコンと叩いてから、ドアを開けた。

「お邪魔します」

そう言う間をあけてから助手席に乗り込んだ。少し、気まずそうな雰囲気を出している。まず、僕にはやらなきゃならない仕事があった。左手を大きく上げ、初夏の頭を殴ってやった。

「イッタァ……何するのさ」

「ふざけんなブスっ何やってんだよ」

と怒鳴りながらも一発殴る。

「お、降りるー！」

初夏の叫びを無視して車を発進させた。

夜のドライブでは必ず行く場所が決まっていた。栄山公園の展望台。山の上にある公園で、駐車場から降りて階段を登って行くと展望台が見えて来る。そこは180度の絶景が広がり、ちよつとしたデートスポットなのだが、最近では近くに出来たタワーへ人が流れているせいで人の気配は少なかった。

僕は初夏と歩く時、いつも一定の距離を取って歩いた。少し遠い様な微妙な距離だった。まるで2人の気持ちを表したかの様な距離。初夏もその暗黙のルールに従って、僕の後ろをついてくる。「うわー今日も綺麗だ」

初夏は最後の数段を駆け足で登り、僕を抜かして頂上へ着くと息切れ混じりに呟いた。

「で、何かあったの？」

初夏に続いて階段を登り終わると、家出の原因を探り始めた。

「うーん…別に何でもないよ」

「あ、そっじゃ帰るよ、まだ地下鉄あるでしょ」

「ゲッ待つて待つて」

初夏の焦った反応に思わず笑ってしまう。辺りは暗くほとんど輪郭だけしか見えないが、彼女が悲しい顔をしているのだろうと検討が付いた。きつと次に出る言葉は可愛げのない台詞なはずだ。

「ん…良いよ…置いてって…ありがとここまで連れてきてくれて」
初夏はそう言うとその場にしゃがみ込んだ。予想適中。ホントにこの女は性格が悪い。僕は初夏の後ろに近付き上着の衿を引っ張ると、

無理矢理立ち上がらせた。

「うわっ何、イヤだ、帰りたくないんだってば」

「うるさい、ちょっと移動するだけだ、歩けブス」

初夏を立ち上がらせると、初夏の衿から手を放し歩き出した。

「あ、待ってよ」

初夏も慌てて僕を追う。

ここの展望台には昔から散策道があった。その道を下って行くとさっきの階段よりかなりの遠回りで駐車場に着く。元々展望台よりも先に出来た道なのにこの道の存在を知る人は少ない。最近、道を整備するのか工事中で簡単な黒と黄色のロープが頼り無く掛かっていた。

「こんなところに道なんかあったのね…工事中みたいだけど…」

初夏が不安げに言う。

「うん、行くよ」

初夏の不安は無視でロープを潜った。

「どこ行くの〜っ」

展望台は夜景のお陰でまだ明るかったことによりやく気付く。この道は真っ暗だった。時々、初夏がちゃんとついて来ているか後ろを振り向く。カサカサと足音が聞こえた。僕の悪戯心に火が付く。

「わぁーっ」

いきなり大声で叫んでみた。

「ひやぁーっなになにっやめてよっ」

初夏の怯え具合に大笑いしながら歩き続ける。しばらく行くと、道が二手に別れている場所に着く。僕は迷うことなく左側の細い道へ進んだ。奥はほぼ森と言って良いほど木々が生い茂っていて、闇が手招いて待っていた。その闇を目掛けて歩き続ける。

「ちょーっと待って、何があるの？」

初夏は恐怖のピークに達し、泣き出しそんな声で言った。

「大丈夫、もう着いた」

そこはちよっとした休憩所になっていて、円状に1部屋分位の原っ

ばと小さいベンチが一つあるだけの場所だった。

「着いたの？なあくんにも見えないんだけど…」

後ろから初夏の疑心暗鬼な声が聞こえる。

「上、見てみ」

「上？…あ…」

「アオイ？」

律子が僕の顔を覗いた。

「どう？良い景色でしょ、気分転換には良いかなと思って…来たこと無かったわよね？」

律子が僕を連れて来たのは、あの展望台だった。山の爽やかな風が僕の身体を撫でて行く。目の前に広がる景色は、いつも夜しか見たことが無かったあの風景だった。

「すつこい…」

僕と初夏は静まりかえった森の中で空を見上げていた。僕達の目の先には今にも落ちてきそうな満天の星があった。初夏はぐつと息をひそめ呟いた。感動を噛み締めるかのように。

「すごいでしょ、今日は雨じゃなくて良かったよ」

「うん、こんなに沢山の星見たこと無い…キレイね…」

しばらく沈黙が続いた。いつの間にかあの一定の距離が無くなり、僕と初夏の腕が触れる。とても穏やかで、優しい気持ちが身体中を纏っていた。とても不思議な安堵感。きつと初夏もそうだろう。

「ここさ…」

僕は静かに口を開いた。

「なに？」

初夏も僕と同じトーンで返事をする。何となく、初夏から離れベンチに座る。もう一度空を仰ぎながら、この数億とある星を見る、自然と出て来る言葉を僕は素直に受け入れることにした。

「ここ…特別な人しか連れて来ないんだ」

「特別っ？…アタシも？」

今日一番の嬉しそうな声を出しながら、僕の横にゆつくりと座る。

「ああ…まあ…2番だけどっ」

「2番？アタシ2番になれたんだ！…まあ…嬉しいなあ…」

初夏は静かに泣きだした。この場所の時間だけが極端に遅く感じた。まるで別の世界に居るような、ゆつくりとした空気に吞まれていった。そこに言葉は無く。ただ、僕達の手はしっかりと結ばれていた。

お昼休み、開放された中庭の春の陽射しは私にとって大好物で、なんとも言えないまったりとした空気に身体を浸らせていた。周りには芝生でお弁当を食べているグループがいたり、寝転がっている男子生徒がいた。時たま奇声に似た笑い声が至るところから上がっている。中庭は校舎に囲まれる形になっていて、廊下の窓から中庭が見えるようになっていて。窓からは上級生が顔を出しているのも見えた。中庭は良く手入れされており、園芸部が作った温室や花壇には色とりどりの花と植物でいっぱいだった。あと一月もすれば今はまだ小さい蕾のバラが咲き乱れるのだろう。その美しさと香りを考えると今からでもワクワクする。でも、それよりも一足先に私をうつとりさせてくれそうな存在が庭の中心にあった。それはとても大きな桜の樹。樹には今にも咲き出しそうな蕾みが出来ていて、もうすぐきつと美しい花が咲くのだろう。樹の下には小汚いベンチとテーブルが幾つか設置されていて、しばらくの間誰も使っていないのは明らかだった。でもその雰囲気は居心地がとても良かった。私と百合はイスとテーブルに陣取り、睡魔との戦いをしている真っ最中だった。

「ねえウイカ…面白い話して」

暇を持て余した百合が呟くように話し出す。

「面白い話ですか…じゃあ素敵な王子様とばったり遭遇しちゃう妄想なんてどう？」

妄想話しは私達にとって得意分野だ。

「白馬に乗って？」

案の定、百合は食い付くように即答する。

「そう、白馬に乗ってるの」

「…この中庭に？」

「そう、颯爽と現れる」

「ああ、ユリの王子様はいつになったら現れてくれるの〜っ」

百合は天にある何かに伝えるように、空を仰ぎながら叫んだ。

「そのうち現れるから安心しなつて」

呆れながらも、優しく諭してみる。

「高校生になつてもう3日目だよっ！それなのにドコを見てもじやがいもしいかないじゃないっ！何なのこの高校はっ！こんなんだつたら私立にしとけばよかったあ〜」

百合は立ち上がり私の目の前でテーブルをパーで叩きながら一人エキサイトしている。百合はとても可愛い。本人は気付いて無いのだろうか？廊下で歩いていても、男子生徒が振り向いて百合を見ていることを。スラリとした身体と、整った顔。私から見てもそこら辺の女には勝てないだろうと思う…。のだけど、なんと云うか、その性格は外見と裏腹でとにかく熱い。

「まだ3日でしょ、あと2年11ヵ月高校生活は残ってます」

冷静に発言しながら立ち上がり、校舎出入り口へ向かつて歩き出した。

「え〜行くの？もうちょつと居ようよ〜！」

駄々をこねるように言う百合の声に立ち止まり、回れ右をして言う。
「次の授業なんだつたか忘れちゃったんだもん…それにあと10分でお昼終わるよ？」

「もう〜？次の授業なんだつけ〜…あ、そうだ次、選択！」

バタバタと百合が自問自答しながら追つて来る。出入り口で百合を待ち、追い付いたところで校舎に入った。

一年生の教室は4階にある。登るだけでも一苦労だと階段を目の前にするだけでいつもゲンナリした。各階の廊下では男子生徒が大騒ぎをしながら走っていたり、先輩であろう女子生徒が床に座り、化粧を直している。横目でその光景を見ながら階段を登り続けた。
「…選択？じゃあ百合とは別ね」

途中さっきの百合の言葉を思い出して、聞き返した。

「もーどうしてウイカ音楽取らなかったの？」

「あーアタシも音楽にしたかったけど…音楽って高いじゃない？」

私は苦笑いをしながら答える。1年生の選択授業は芸術科目で、入学前に好きな科目を選ぶことができたものの、迷うことなく一番教材費がかからない科目を選んだ。

「でもさ、確かモエもゆーちゃんも音楽だよ？せっかく4人そろえるはずだったのに…」

百合は少し口を尖らせながら残念そうに言った。

「うわ、アタシだけ仲間はずれ？」

正面を見たまま、寂しがる百合にちやかすように言った。中学からの仲良しと一緒に授業を受けるのは、まだ知らない顔ばかりの高校生活ではかなり魅力的な話したが、百合が思っているほど私は寂しくもなかった。いや、でも、やっぱり心細いのはあるかな…。

「百合ーウイカーッ」

教室の前に着いたところで、誰かが私達の名前を呼んだ。声がする方を百合と同時に向くと、2クラス離れた距離からモエが両手を振っているのが見えた。横には棒付きのアメをくわえてるゆーちゃんの姿も見える。

「モエー！ゆーちゃん！」

百合が答えるように2人の名前を叫ぶ。すると、モエはゆーちゃんの手を引き全速力でこちらに接近してきた。

「次、選択でしょっ？一緒にいこっ」

2人の手には真新しい音楽の教科書があった。

「モエっゆーちゃんっ聞いてよっウイカったら音楽じゃないの！」

百合がモエに抱き着きながら訴える。

「えっ？」

「えーっ？」

モエとゆーちゃんが同時に似たようなリアクションをする。

「知らなかった、ウイカ何にしたの？」

「あー…」

キンコーンカーンコーン

私が口を開こうとした瞬間、予鈴が鳴った。

「あ、教科書と筆箱持つて来なきゃ、百合もでしょ？」

「うわっヤバイ、ちよつと待ってて」

私達は急いで教室へ入り、必要な物を持って再び廊下へ出た。廊下で待たせたモエとゆーちゃんと全員で走り出す。音楽室の前に着き、3人にじゃーねえーと軽く別れを告げた。

「ウイカはどこ行くの？終わったら行くからっ」

百合が寂しそうに叫ぶのを聞いて「ここ」と音楽室の隣にある美術室に指を指した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1409e/>

short-lived love

2010年11月21日14時51分発行